

命運的エンカウンター

三坂しろな

「わたし、あなたに惹かれたんです」

暖かい春の日差しを、惰眠とともに満喫していた昼下がりが。俺を夢の中から引きずり出したのは、知らない女の声だった。顔も見えない。声の感じから、おそらく十代後半から二十代といったところだろうか。

「君は誰だい。どこかで会ったかな」

「覚えてないんですか」

「いつ出会った？」

「昨日の夜です」

驚いた。最近もいいところじゃないか。毎日をしつかり記憶しながら生きていくわけではないから、繊細に思いつくことはできないが——大方、いつものように繁華街で呑み歩いていたのだろうが。

「話したことはないんですけど」

「……君はなかなか、大胆なんだな」

「お互い様ですよ」

ほぼ初対面の女性に、そんなことを言われる筋合いはあつただろうか。

「ところで、君はいつたどこに隠れているんだい。確かに他人の家に勝手に上がり込むのはよくないが、このさい姿を見せてくれないか」

「何言ってるんですか」女性は呆れたように言った。「ずつとあなたの横にいますよ」

「馬鹿を言うな。ベッドの下にでも隠れているんじゃないのか」

女性はしばし沈黙したのち、何かを理解したように「あー、なるほど」と呟いた。

「わかりました。あなた、わたしが見えないんですね」

「だからさつきからそう言ってるだろ」

「違う意味です。わたしがここに存在しているのに、あなたには見えていないということですよ」

……わけがわからない。何を言っているんだ、この女は。いるのに、見えない？ そんなの、まるで、

「……幽霊、じゃないか」

俺が震えた声でそう言うと、女性はなぜか少し楽しげに、「そうです。わたし、死んでるんです」と続けた。

「幽霊になってでも、会いたいって思ってたから。」

あの夜はまさに、命運的な出逢いだっただけですよ」

「はあ」そりやどうも、といった感想しか出てこない。

彼女からすれば俺のなにがしかに惚れたのだろうが、俺は彼女のことを全くもってご存じない。顔も体もないから、わかるのは声くらいだ。数々の女性と付き合ってきたが、これは史上最もつまらない恋愛であろうことは容

易に想像がつく。……そもそも、この状況を恋愛と解釈するのにはかなり抵抗があるが。

「それで、君は……ずっと君と呼ぶのもなんだか疲れるな。まずは自己紹介をしないか。君だつて僕の名前、知りたいだろ」

「知つてます。松田トオルさん、貫くと書いてトオルと読むんですよ」

「……合ってる、が」名字はともかく、名前まで？ たいてい字だけ見た初対面の人には「カン」と呼ばれるのだが、それすらも当たっている。背筋を冷や汗が伝った。

「わたしは暮林ユキくれはやしつていいいます。ユキは冬に降る雪、冬生まれだから雪なんだそうです。単純でしょう」

「なるほど、ユキちゃんか」かわいらしい名前だ。元カノとも被つてないし。

「いきなり下の名前で呼ぶタイプなんですわね。気持ち悪い」

「そっちはグイグイくるくせに、迫られるのは嫌なのか」

「グイグイきたのは物理的距離だけじゃないですか」

「めんどくさい奴だな。脳内できりり美少女を想像して補完してやろう。」

「それで、ユキちゃん。僕の部屋まで来て、どうするつもりだい？ いくら君が僕に惹かれたといっても、実体がないんじや付き合ひはできないだろう。成仏する前に

俺のご尊顔を拝みにきたといつたところかい？」

「ご尊顔とか自分で言っちゃう人なんですわね。気持ち悪い」

「おいおい、さつきから言葉が辛辣じゃないか？ それで惚れた人間に対して出せる態度か？」

「そうですね、わたしも死んだ身ですし、多くは望みません。ただ、あなたとお話がしたい。たぶん一週間くらいはここに来られますから、毎日、わたしと話をしてください」

そこで彼女の声が止まったので、お願いはそれで全部らしかった。「……え、それだけ？」

「多くは望まないつて言つたでしょう。一步も動かずに忘れるとか鶏以下ですか」

「いや、そう言つたのは覚えてるさ、もちろん」言われて思い出す程度には。「でも、本当にそれだけでいいのか、と思つてさ……わざわざ霊体にまでなつて俺の元へ来て、それだけ？ つて」

「まずは友達から、つてよく言うじやないですか」

「……まあ、そのくらいなら全然問題ないけど」

「……つきり一緒に天国へ行こうとか、死なばもろともとか、そんなホラー的展開を予想して内心ビクビクしていたので、きわめて平和的な要求に心底ホツとした。口は悪いが、悪い子ではなさそうだな。」

「受け入れてもらえて助かりました。抵抗するつもりな

ら、それならそれでこちらにも手段はあったんですけど」

「やだこわーい」

「気持ち悪いです」

霊体の身で強制的にこちらを従わせる手段とは。精神攻めか、それとも乗っ取りでもするのだろうか。呪い殺すとかできたりするのか。

「……早速今から、といいたいところなんですけど、今日はもう時間ですね。また明日、同じところにお伺いします」

「時間？ 俺なら大丈夫だけど」

「わたしが駄目なんです。では、また明日」

ユキは別段名残惜しそうにもせず、そう言って帰っていった。帰ったかどうかわかるわけではないが、それきり声もしなくなっただけで帰ったのだろうか。

そうして一人、寝そべって天井を見つめて、ふっとため息が出た。

「……頭おかしくなったのかな、俺」

*

「お邪魔しますよ」

ユキの声は何の前触れもなく頭に響いたので、俺は驚いて「へあつ」と間抜けな声を出してしまった。

「……ユキちゃん、次から来るときはノックでもしてくれない？」

「霊体にそんなことできると思えますか。つくづく馬鹿ですね」

ううむ、それもそうだ……しかし、無音の状態からいきなり声を響かせられると心臓が悪い。これがあと一週間は続くのだから、いつショック死してもおかしくない。……ショック死ってほんとに驚いただけで死ぬのかなあ。

「ラップ音でも鳴らしますか」

「そのほうがビビるな、絶対」

要はいきなり大きな音を出されると困るので、小さな音から徐々に、といった気遣いをしてほしいのだが……恋人？ に敬意のかけらも感じない女には無理な話なのかもしれないが。

「じゃあ……鈴鳴らすとか」

存外まともな提案。「鳴らせるのか？」

「ラップ音のオプシオンで鈴の音があったと思うので」

ラップ音にオプシオンなんてあるのか。好きな音鳴らしていいのだろうか。ちよつと楽しそうだな。

「ポイント足りるかな……バイトしなきゃかなあ」

……幽霊になっても、バイトとかあるのか。

「話の内容なんですけど、あなたと出会った、あの夜の話を話したいんです」

ユキは改まった真面目なトーンで——もともと彼女は——ずつとこの調子で話しているのだが——話を切り出した。

「一昨日のことか。正直、俺はほとんど記憶にないんだが」

「一昨日のことですか？ それともその前もないんですか？」

「……一昨日に特筆すべき出来事があったとは思えないんだが。俺が覚えているのは重要なこと、インパクトのあったことだけだから」

「……サル並の記憶力ですね。小学生でももう少し憶えていられますよ」

否定はできない。脳は使わないと衰えるらしいが、ちやんと勉強していた学生時代より数段衰えているのはひしひしと感じる。きのうの晩飯も、ひいては今日の朝食も、俺の脳には何の新鮮さもインパクトももたらさなかったため、さっぱり記憶にない。

「逆にごこまでの記憶ならあるんですか」

「昨日君が来て、奇妙な体験をしたことは、これ以上ないほどはつきり記憶している」

「それはそうでしょう」食い気味にユキが口を挟む。「それ以前で、一番新しい記憶は」

「ううむ」俺は記憶を巡らせた、フリをしていた。彼女に意地悪をしたかったわけじゃなく、頭が回らなかったのだ。余計な労力を使いたくなかった。

「大方、一昨日は酒でも呑んでたんだろ。頭も痛いし記憶もないから」

「……お酒、ですか」

ユキはそれから少しの間黙り込んでいた。やっぱり酒の失敗が彼女との遭遇につながったのだろうか？

「ヤケ酒ですか」

「……ああ、」どうして酒を呑んでいたのか、か。普段ならすぐに連想できるのだろうが、やはり脳が呆けている。

「……思い出した」

正確には、思い出さないようにしていたのだと思う。「俺、彼女に振られたんだった」

*

翌日。ユキが昨日の「彼女」について知りたいと言ってきたので、今日はその話をする事になった。ちなみに今日も入室時は無遠慮ラウドスピークだった。

「日払いのバイトが引越し屋とかしかなくて。今の時期は人気なんですけど、あれ普通テレキネシス免許取得してないと無理みたいですよ」

「あれ免許制なんだ」

というか、幽霊も引越しするの？ しかも春だから多いって……あっちにも季節感ってあるのだろうか。

「彼女は大学の友人で……友人の友人ってところだ。年上だったけど、気は遣わなかった。気さくでいい人だっ

た」

言っちゃ悪いが、俺はわりかしモテるんだ。おかげで普段は自分からアタックするなんてことはないんだが、彼女のときばかりは違った。

「猛アピール、猛アタックの末に、やっと承諾してもらえた。すっげえ嬉しかった」

ユキはどんな顔をして話を聞いているのだろうか。あまり元カノの魅力を語るのはよくないか。

「……でも、あの夜、フラれたんだ。付き合ってた一年と三ヶ月くらいだった」

「理由は何か言ってみましたか」

「他に好きな人ができた、って。それだけだと思いたい。」

「それで、ヤケ酒してたんですか」
「多分な」

俺は記憶力がだいぶ弱みみたいで、加えて酒の力まで使えば、たいていのことは忘れられるみたいだ。それこそ、あれほどまでに愛していた彼女のことでも。

「本当に愛していたんですか、彼女のこと」
「もちろん」

「今は？」
「今？」

どうなのだろう。別れて悲しくなるなら愛していると
いえるかもしれないが、忘れたと思うのは愛している

うちに入るのだろうか？

「……今は、愛しているとは、いえないかもしれない」
「わたしに媚を売ろうとはしてませんよね」

「まさか」

というか、媚びるも何も、先に惚れてきたのはそっち
だろう。俺はユキに恋心なんて抱いてない。

「……ふうん」

ユキは淡々と喋るので、感情の動きが全く見えてこない。
い。

「ユキちゃんこそ、本当に俺のこと愛してるの？」

「最初に言った通りです。わたしはあなたに惹かれたんです」

相変わらず媚びも甘えもしない口調。

……愛を感じられないって、つらいな。

*

四日目。この日俺の耳に最初に入ってきたのは、チリンチリンと涼しげな音色だった。

「鈴の音、買えたんだ？」

「中古の風鈴ですけどね」

ラップ音の中古の概念がわからない。☹️みたいなもの
なのか？

「仕方ないから普通の月給アルバイト始めて、これはク

レカで決算しました」

「霊界って普通に経済回ってんの？」

「ま、人間がいれば当然社会が生まれる、って感じですかね。腐っても鯛、腐っても人間ですね」

「……もしかして、生きてても死んでても、体感はそれほど変わらないんじゃないか？」

「それで、トオルさん。今日も思い出してほしいことがあるんです」

ユキは珍しく俺を名前で呼んだ。四日目だから少し距離も縮まっているのだろうか？

「また頭を使うのか」

「あの夜の、あなたが元彼女にフラれた後の記憶です。まだ一週間も経ってませんから、正常な人間なら何の苦もなく思い出せるはずですがね」

とうとう異常者扱いかよ。いや、前までもサルだの鶏だの、散々な言われようだったけど。

「言っただろ、酒を呑んでたから覚えてないって」

「呑む前までの記憶もありますか？ どこで、とか、いつ、とか」

5W1H的なやつか、懐かしいな。英語は苦手だったから全部は言えない。

「場所は……繁華街によく行く飲み屋があるから、多分そこだな。安酒だけど、金なかったし」

そこまで言って、ふと気になった。「そういえば、ユキちゃんってお酒飲めるの？ 何歳？」

ユキはすぐには答えなかった。

「幽霊ですから、年齢みたいな概念はもうないんですよ」

「……そうなのか」

「……生前は未成年でしたけれど」

彼女にしては珍しく、返答にためらっていた様子だった。生きていたころを思い出すとか、死んだことを実感してしまふとか、いずれにせよ聞かれないようなことだったのだろうか。

「時間は……そうだ、携帯に彼女との通話記録が残ってるはずだ」

そう思って、ポケットの中を探す……が、

「……あれ？」

ズボンのポケットにも、上着の中にも、携帯は見当たらない。俺はいつもそこに携帯を入れるようにしているのだが。

「携帯電話ですか？」

「ああ、いつもココにしまっているはずなんだが……」

三回探して、やっぱりない。「ごめん、見当たんええや」

「残念でしたね」

やはりそれほど残念そうでもなく、ユキは次の言葉を続けた。「繁華街までは、車で？」

それが真つ当な質問だったことに、俺は少し驚いた。

「……あ、ああ」

「一人でお店に行つて、一人で呑んでたんですね」

「……そうだ」

『一人で』を二回も繰り返したのは嫌がらせか——いや、それより特筆すべき点は、ユキがここで例の謎批判を入れてこなかったことだ。ことあるごとに、それはもう俺をチクチク痛めつけるのが生きがいだと言わんばかりに——いや死んでるんだけど——悪口を挟んできた彼女が、携帯電話の在処を忘れてあたふたしていた俺の様子に一言もケチをつけてこなかった。質問も少しだが食い気味に感じた。

……焦ってる？

思えばこの奇妙な会談も四日目。一週間をリミットとして設けたので、残り半分を切ったことになる。

……それにしても、まだあの晩のことしか、話題にしていないが。

「……ちよつと、聞いてるんですか、トオルさん」

彼女が知りたいのは、本当に俺のことなのか？ 俺から何かを聞き出そうとしている……？

と、俺が思考の沼にはまりかけていた、そのとき。

ぐら、と頭が揺れた。バットを軸に十回回つた後のような、ふわふわ、ぐらぐらした感覚。回る。痛い。ユキが何か言っているようだが、その声もしだいに遠ざかっていく。現実とぶつ切り切り離されたように、俺は

意識を絶つた。

五日目。

彼は様態が悪化したみたいで、あれから丸一日経つた今でも、面談は禁止されたままだ。

もともとわたしには時間がない。あと二日経てば、わたしはここを立ち去らざるを得ない。

まだ彼は気づいていないようだ。本当に鈍い。ナマケモノより鈍い。ナマケモノでも野生ならもう少し察しが良いだろう。

彼の部屋の向かい、「暮林」の名札が入つた部屋を見る。

……彼女はまだ目覚めてすらいらないのに。

血の味がした。唇を噛むのが癖になりつつある。

今頃阿呆みたいな顔で眠っているであろう、トロくて間抜けな彼の部屋を、睨まずにはいられなかった。

*

六日目。鈴の音が響いて、俺は眠っていた頭を起こす。

「昨日は大丈夫だったんですか」

心なしに、ユキの言葉が柔らかいような気がする。

「ああ、なんとか良くなったみたいだ。それで——」

*

ユキがどこにいるのかは、わからない。でも、それは、ユキのせいじゃないんだ。

「——やつと分かったんだよ。ここが、病院だったこと」

「昨日、意識が戻ったとき、最初に聞いたのは君の声じゃなかった。看護師さんだった。昨日か一昨日、運ばれてきたのかと思ったけれど、そうじゃなかった。俺は、ユキちゃんと会ったあの日からずっと、病院のベッドの上で寝ていたんだな」

「……正確には、わたしが来る一日前の夜からです」

「そうたいした違いじゃないだろ。それと」

「……未だにこれは、信じられないのだが。」

「ユキちゃん。君は、本当にここに存在していたんだね」

「だから、そう言っていたじゃないですか」

呆れたように答えるユキ。彼女は、生きています。

「……ユキちゃんが見えないんじゃないやなくて、俺の目が見えていなかったんだ」

少しの間があつて、ユキはクスリと笑った。

「……ほんと、トオルさんって馬鹿なんだなあって思いましたよ。あなたがわたしのことを幽霊だなんて言うから、わたしがちよつと幽霊のフリしてあげたら、本当に幽霊と会話してるって思いこんでるんですもん。新生児

でももう少し疑いますって」

ユキがそう言ったことで、俺の目が見えなくなっていた、という事実が、滝の上から降ってきた漬物石のように、容赦なく俺を押しつぶした。今までそれを自覚していなかったから、ここを自室だと思いついて、服も普段のジャンパーとズボンだと思つて疑いもしなかった。あれは全て、脳内で補完した幻だったというのか。

「では、トオルさん。あなたはどうして視力を失い、病院に運ばれていたのでしょうか」

「……へ」

今から俺が、それを聞こうと思つていたのだが。

「……教えてくれないのか？ ユキちゃんは知らないの？」

何言ってるんですか、とユキはため息をついた。

「これをあなたに思い出させることが、わたしが下らない演技までして、あなたの部屋に通つていた目的です。

これはあなたが、あなた自身で、思い出すべきことなんです」

……俺、自身で？

「わたしはずつと、一昨日までの生産性のない会話の中で、あなたにヒントを与え続けていたんですよ。感謝してほしいものですね」

「そんなこと言われても、まるで検討も——」

「最後にひとつ、とびきりのヒントをあげます」

ユキの声が遠ざかっていく。

「わたしは、幽霊のフリをした以外は、何も嘘はついていませんよ」

それきり、ユキの声は聞こえなくなった。

*

ユキの言葉を信じるなら、彼女との会話を思い出せば、答えは導き出せるはずだ。

ユキが聞きたがっていたのは、あの晩の俺の動向と、俺の元カノのこと。

まずはあの晩の出来事の流れを追ってみよう。俺は一年と三ヶ月付き合った年上の彼女に別れを告げられ、それを忘れようとして繁華街まで車で出て行った。そこでうまいこと酔っ払って、彼女のことともきれいさっぱり忘れて……

待てよ。車で？

呑みに行くときは、いつもならタクシーを使うのだが。

……金欠？　そういえば、そんなことを言っていたような気もする。なにか高い買い物をした？

……考えていると眠くなってくる。俺はことわざみたいなものをあまり信用しないクチの人間だが、「春眠暁を

覚えず」という言葉には全身全霊全力で同意する。

……春。

『春生まれだからハルなんだって。単純だよねえ』

誕生日、プレゼント？

『「ごめんね、トオルくん。わたし、トオルくんのこと、なんにも考えてなかった』

これは多分、あの晩の記憶じゃない。もう少し前のだ。

……晩の話に戻ろう。

車で来たとなると、やっぱり車で帰ることになるよな。彼女の記憶でさえ曖昧になるほど酔って、それで運転なんてしたら……真つ先に考えられる可能性は、事故。

となると、ユキとどこで会ったのが謎だ。未成年と言っていたから飲み屋にはいなかっただろうし、タクシ―も使えないほどの金欠ということは、その夜に飲み屋以外に寄ったとも考えにくい。

と、なると。残る場所の一つ。

『わたし、あなたに惹かれたんです』

『あの夜はまさに、命運的な出逢いだったんですよ』

……笑えてくるな。全部、俺の勝手な思い込みだったわけだ。

「……罪を自覚しろ、つてことか」

*

「お邪魔します」

中古の風鈴の音を響かせて、ユキが戸を開ける。

「準備はできましたか、トオルさん」

「ああー準備というか、覚悟か。」

「見当違いなこと言ったら殺しますよ」

「……っ」代償、デカくないか。「だ、大丈夫……だと思っ、

多分、いやきと、絶対」

「では、よろしくお願ひします」

「今日から丁度一週間前のあの夜、俺は彼女に振られて、その事実を忘れるために、飲み屋でヤケ酒してた。この日は彼女の誕生日まで一ヶ月を切ったところで、数日前に彼女へのプレゼントを買ったばかりだった俺は金がなくて、自分の車で店まで行ったんだ。」

もちろん帰りも車を運転して帰った、んだと思う。そこからはよく憶えていないが……多分、事故ったんだ。それで、ユキちゃんのこと——轢いたんだと思う。

ユキちゃんが『わたしは嘘を吐いていない』って言ったのは、俺が勝手に勘違いして、意味を捉え違ってたっていう意味」

わたし、あなたに轢かれたんです。

あの夜はまさに、命運的な出遭いだっただんです。

……こう捉え直せば、筋が通る。

ここまでの推論を、俺は吐き出すようにつらつらと述

べた。ユキが黙ったままなのが辛かった。

五分ほど経っただろうか、俺の体感だけだろうか。ユキはようやく口を開いた。

「もう一つ、付け足すべきことがあります」

心臓がドキリとした。何か足りないところがあつたか。

「……春も、です」

「……春？」

春生まれだから、ハル。冬生まれだから、ユキ。ユキは一呼吸置いて、意を決したように言った。

「あなたの元彼女、暮林春は……わたしの、姉です」

なんとなく、そんな気はしていた。といっても、そう思ったのは昨日が初めてだったのだが。

「まあ、四日間の会話の中でこのことに気付けっというのはさすがに無理がありますから、セーフってことにしましょう。命は取らないであげます」

「よかつ……」……いや、間違えてたら命取られるっていう前提のほうがおかしいだろ。

「……姉はあなたに電話した後、自室に引きこもってずっと泣いていたんです。心配だったので、わたしは姉を誘って外へ出しました。話を聞こうと思って、繁華街のカフェに行っただんです。そこで事情を聞きました。……トオルさん」

「はい」急に呼びかけられたので、思わず敬語が出てし

まった。

「彼女があなたに別れを告げたのは、あなたのためだったんですよ」

「……俺の、ため？」

全くピンとこない。彼女は好きな人ができたから別れたんじゃないのか？

「……ホント、優しいんですよね、お姉ちゃん。あなたみたいなバカにはもつたいたいと思います」

それはまあ、思わなくもないが。

「トオルさん、前に彼女とお金のことではいざこざがあったみたいですね」

「……ええと」

ユキはわざとらしく大きなため息をついた。「本当、手のかかる猿ですね。仕方ないのでわたしが説明します。

あなたが彼女とデパートに行ったときのことです。姉がブランドものの服を見て、何気なく『あれ欲しいなー』と呟いたとき、あなたは彼女にすごい剣幕で怒りだしたんですよ。憶えてないですか」

「……ああ、確か、去年の彼女の誕生日が近くなってきたころだったな。俺は彼女と違って、家賃も食費も公共料金も、全部一人でやりくりしなきゃいけないんだ、ハルさんみたいにそんなにしょつちゅう高い買い物できるわけじゃないんだ……って」

今思えばけっこうキツイ言い方だったな。実はそのと

きも、彼女への誕生日プレゼントを二週間くらい早く買っておいたから、それでお金がないのもあったんだよな。まだ使わせるのかよ、って思いも正直あった。

「でも、その件は翌日にちゃんと謝ったし——」

「あなたの方は、それで済んだかもしれませんがね」

ユキの口調は冷たかった。

「姉のほうでは、ずっと根に持ってたんですよ。あなたの苦勞を考えられてなかった、って」

……そうだ、あの晩は彼女の誕生日まで、約一ヶ月というところだった。もう一週間で、そのいざこざの起きた日から一年といったところ。

「……姉は、自分がトオルさんという、負担をかけてしまうのではないかと思っただけです。うちはけっこう裕福なほうで、あなたと姉は金銭感覚も違っていたでしょうし。……あなたが去年、誕生日プレゼントを二週間前に買ったと言っていたので、その前に——誕生日のおよそ一ヶ月前に、別れの連絡をすると決めました」

……確かに、彼女は優しかった。気も使えるいい人だった。でもそれは、年上だからできる、経験の差というか、そういうものだと思っていた。

「結果的に、全部が裏目に出してしまったわけですが」

「……ユキちゃんは、さ」聞くのは怖い。「俺のこと、憎いと思うか？」

「そりゃそうですよ」即答。「そもそもあなたが飲酒運転

なんてしなければ、こんな事故も起きなかったんですから」

それはもう、ぐうの音も出ない。

「……でも」ユキはためらいがちに続けた。「わたしがあの夜、姉と繁華街に行くことを提案しなければ、何事もなかったはずなんです」

それは、そうかもしれないが、でも——

「それは違うよ、ユキ」

突如、少し遠くから別の声が聞こえた。この声は——聞き覚えがある。

「……お姉、ちゃん」

ユキが震えた声で呟き、直後、ガラスの割れた音が響いた。自由になった鈴が、転がりながら軽い音を鳴らしていた。

*

「本当に、すみませんでした」

彼女らがどこにいて、どんな顔をしているのかは分からなかったが、(おそらくユキの)鼻をすすする音のするほうへ向き直り、限界まで頭を下げた。

「大丈夫、私はちょっと腕折れて頭打ったくらいだから」

「え、だ、だいぶ重傷じゃないですか」

「視力に比べたらたいしたもんじゃないって……って

えええっ!? ユキ、あんた車イスなの!？」

「えええっ!？」

あ、そうか。だからユキが入ってくるときは、足音がしなかったのか。性能のいい電動車イスならほとんど無音だろうし。

「……ホントは杖でもいいくらいの怪我なんですけど、親が心配だから使えって送ってきたみたいで……」過保護ですよ、とユキは少し迷惑そうに言う。

「そんなことより、お姉ちゃん、『違う』ってなに?」

「ああ、それはね」

ハルさんは少し小声になって、

「……さっきの二人の会話、盗み聞きしちゃってたんだけど。結局のところ、一番悪いのは、やっぱり私だと思う」

でも、と口を挟もうとしたユキを制するように、ハルさんは続ける。「私が、勝手にトオルくんのこと思いやっけて、勝手に結論づけて、結果的に誰も幸せにならない方向に事態を運んでしまったから。私が、大事なことを言えずに、しまい込んで解決したがって……臆病な人間だったから」

彼女、おそらくハルの両手が、俺の右手を拾い上げて優しく包み込んだ。ほんのりと温かくて心地良い。

「だから、これからは私、もっとハッキリ言うね」

彼女は一言、「トオルくん」と呟いた後、大きく息を吸

って、

「トオルくんって本当バカだし、間抜けな面してるし、お金持ってないし、調子乗るとすぐ気が強くなるし、お酒弱いし、バカだし、あと今回の件で前科ついたよね！ほんとバカ！」

「えっ」

馬と鹿に何の恨みがあるというんだ。ここは森林か。

「……だけど、そんな馬鹿なトオルくんが、やっぱり好きみたい、私」

……ん？

「もう一回、お付き合いしてくれないかな」

ふう、とユキがため息をついた。落胆したというより、呆れたような、それか安心したような感じのため息だった。

「私、あなたに惹かれたみたいだから」

たぶん、今度は思い違いじゃない。